

令和元年12月10日(火) 10:00～

諏訪市文化センター 第一集会室

第2回 諏訪地域の高校の将来像を考える協議会 議事録

次 第

- 1 開 会
- 2 会長挨拶
- 3 協議事項
 - (1) 目指すべき高校の将来像の意見のとりまとめ方法について
 - (2) 質疑応答
- 4 意見聴取等
 - (1) 旧第7通学区の課題について
 - (2) 旧第7通学区の県立高校の現状と課題について
 - (3) 質疑応答
- 5 委員相互の意見交換
- 6 その他

【議事録】

1 開 会 全体進行（事務局）

・会議は公開 マスコミ各社、一般傍聴希望者を認める（傍聴者 8名）

・欠席者 下諏訪町教育長 松崎 泉

（敬称略）茅野市教育長 山田 利幸

富士見町教育長 脇坂 隆夫

茅野商工会議所 会頭 細田 秀司

下諏訪町青少年健全育成協議会 会長 本山 公之

以上5名

・資料確認

①協議会次第 ②旧12通学区別中学校卒業予定者数の予測 ③高等学校の分類について(概要) ④諏訪地域各高等学校のパンフレット ⑤旧第7通学区 県立各高等学校の取組状況について(事前配布資料)

2 会長挨拶

○会長 金子ゆかり 諏訪市長

・高校の将来像に向けての取り組みは、全県各地、旧通学区単位で進められている現状である。すでに、上伊那の地域では協議を終え、地域の要望を取りまとめた意見書を提出されたと聞いている。諏訪地域では、10月8日に、この協議会の1回目を開催し、本日が2回目となる。諏訪地域の特徴を踏まえた総合教育環境を県教委に伝えていくために、本格的に議論をやりたいと考えている。その第一歩にいよいよなっていく。諏訪地域の未来を担う子どもたちへの教育については、高校だけで良いという訳ではなく、少子化が進んでいく状況、地域、各業界における人不足、後継者、承継、事業承継の課題、様々な課題が生じている。幼少期の幼児教育から小学校、中学校の初等、義務教育、中等教育である高校教育から社会に出ていくまで様々なステージで、それぞれの取り組みが必要と感じている。そうした、一貫した教育の状況を見据える中で、個々の課題が融合されるということに期待している。関係する子どもたちばかりでなく、保護者の皆さん、地域の産業界を含むそれぞれの住民の皆さんの考え方、意見、希望を幅広く伺った上で集約していきたいと考えている。

本日は、管内の9校の県立高校の校長先生方を招き、高校教育の現状をまず理解するという事で、それぞれの状況、現状をご説明していただくことになっている。お話を伺って、活発な意見を頂きたい。

3 協議事項（進行 会長）

（諏訪市教委）(1)「目指すべき高校の将来像の意見の取りまとめ方法について」の説明

○資料①

◇諏訪地域のあるべき高校の将来像を考える4つの視点

(1) 中学生が自己を伸ばし、夢や希望を実現できる魅力を感じられる高校づくり。

(2) 子どもの成長過程や特性に合わせ、「子どもの主体性や可能性を伸ばす教育実践」により、たくましく自立していくことができる高校教育の実現。

(3) 郷土への深い愛着を持ち、地域の未来を担い、世界への視野を広げる高校教育。

(4) 効果的な教育資源の配分・活用による、諏訪地域全体の教育レベルの維持の向上。

諏訪地域のあるべき高校の将来像を取りまとめ、意見書に反映するために、共通の視点として捉えて頂き、本日、次回以降の関係団体との意見聴取、意見交換において参考にしていただきたい。

◇意見集約のプロセス

- ・第1段階として、現状の高校教育の実態と課題の理解(12月10日)
旧第7通学区の9高等学校の校長より、各校の教育目標や県立高校で統一的に取り組んでいる「探究的な学び」、「信州学」、「地域と連携した活動」に関する取組、課題等を説明、説明後、意見交換を通じて諏訪地域の高校の実態と課題を理解する。
- ・第2～5段階
地域産業界の意見・希望の集約
保護者（PTA関係者）の意見・希望の集約
高校同窓会の意見・希望の集約
子どもたち自身の意見・希望の集約
- ・時期、順番、方向については、これから幹事会にて詳細を決定。
- ・第6段階
一般地域住民の意見・希望の集約
以上を集約して、意見書を作成していく。

(2) 質疑応答

発言者	内 容
司 会	議論の基軸となる4つの視点、そして、段取りとしてのプロセスと大まかな方向性の説明があった。このことについてご質問、ご意見等お願いします。
委 員	意見なし
司 会	この方向性に沿って協議会の意見書としてまとめていきたい。ご了解を頂けますでしょうか。ご了解を頂いたと認められますので、この様に進めて行きたい。

4 意見聴取

(県教委)

(1) 旧第7通学区の課題について

○資料1

旧12通学区別の中学校卒業予定者数の予測ということで、最新のデータで、2018年度の新生児は県全体では、13,674名、1歳児14,744名この一年間で、1,100名の少子化が進む。諏訪地区でも約90名の減少であるというデータ。

○資料2

高等学校の分類について(概要)

【1】課程による分類

- ・全日制 富士見、茅野、諏訪実業(全日制)、諏訪清陵、諏訪二葉、下諏訪向陽
岡谷東、岡谷南、岡谷工業
- ・定時制 諏訪実業(夜間定時制)
多部制は「定時制」に分類 (設置校：東御清翔、箕輪進修、松本筑摩)
- ・通信制 旧第7通学区設置なし
設置校：長野西、松本筑摩
令和2年4月 長野西高校望月サテライト校設置

【2】学びの内容による分類

- ・普通科 富士見(普通科)、茅野、諏訪実業(定時制)、諏訪清陵、諏訪二葉、下諏訪向陽、岡谷東、岡谷南

- ・専門学科 富士見(農業科)、諏訪実業(全日、商業科・家庭科)、岡谷工(工業科)
 大学科、農業、商業、工業となっているが、それぞれの高校によって特色を出すということで、学科名も違っている。
 総合技術高校 旧7通学区設置なし
 専門学科間の連携による他学科と協働した学びを実践
 産業構造が大きく変化し、グローバル化が進行する中で、変化に柔軟に対応できる専門能力を育成
 設置校：須坂創成、佐久平総合技術(浅間キャンパス)、飯田 OIDE 長姫
- ・総合学科 旧第7通学区設置なし
 普通科目及び専門科目を選択履修し総合的に学ぶ学科
 自分の適性を発見し、キャリア教育を重視した学びを実践
 設置校：中野立志館、丸子修学館、佐久平総合技術(臼田キャンパス)
 蘇南、塩尻志学館

【3】設置基準による分類(全日制)

- ・都市部存立普通校：諏訪清陵、諏訪二葉、下諏訪向陽、岡谷東、岡谷南
- ・都市部存立専門校：諏訪実業、岡谷工業
- ・中山間地存立校：富士見、茅野

(2) 旧第7通学区の県立高校の現状と課題について

(富士見高等学校 小池 千尋校長 事前配布資料 1P)

- ・今年で創立93年を迎える、全日制課程の普通科と専門学科の農業科の2学科設置している。県内には、農業系の高校は11校あり、農業科という大きな括りの下に、それぞれ特徴ある小学科がある。本校では、園芸科を設置し、3つの分野、草花、野菜、農業機械を学んでいる。
- ・在籍生徒数257名。今年の1年生から普通科が1学級となり、全体で8学級、再来年は全体で6学級となる。
- ・教育目標は記載の通り。地元地域や社会を担う人材の育成を図ってきた。地域から一定の信頼と期待を頂いていると感じている。同時に地域のご理解とご支援には、感謝の気持ちでいっぱいである。
- ・「探究的な学び」については、これからの社会を担っていく生徒に必要な力を付けさせる点で、非常に重要になってきている。しかし、この点からの授業改善は、本校の場合、始まったばかりで、第1回に続いて、第2回目の校内公開授業が10月3日に行われた。来年度は電子黒板などIT機器が、設置される順番であるので、これらを活用して授業改善に努めていきたい。そして、この授業改善が進むことで生徒たちは、自分や仲間の成長を実感でき、ひいては、入学生徒数の増加につながると考えている。このような意味からも、教育活動における課題の欄の最初に、授業改善を上げている。
- ・「課題解決型学習」では、普通科1年の「総合的な探究の時間」の取り組みになる。これについても、記載の通り(7/16 富士見町長を訪問した代表生徒4名が町の課題についての意見交換。9/14 町内から講師6人を呼び、グループワークと発表等)の取組が始まったばかりで、試行錯誤といった状態である。教育活動における課題の中で、普通科の魅力づくりを上げたということはこのこと。
- ・一方で園芸科の「課題解決型学習」は、課題研究や農業クラブの活動として、地域と連携した活動欄にある、富士活娘、グローバルGAP中玉トマトなどの活動がある。特に、グローバルGAPは、全国で6番目、現在の農業高校では初めて、このグローバルGAPという認証を同窓会のご支援のもと、2018年3月に取得し、以降更新している。そして、来年の東京オリ・パラで、選手に提供したいという夢の実現に向けて、活動をしている。

- ・平成 24 年の日本学校農業クラブ全国大会で、持続可能な農業や地域づくりについて発表し優勝した養蜂部の活動も続いている。今後は、トマトの取組もそうであるが、持続可能な社会の実現に向けてという観点から、更に、ブラッシュアップを図っていきたい。このような取組に関しても、まさに、持続可能な仕組みを外部との連携の上で考えて行く必要がある。また、専門学科であるので、産業界との関係も大変重要。社会変化への対応も忘れてはならない。教育活動における 3 つ目がこれに当たる。
- ・教育活動における課題の 4 つ目の、特別な配慮の必要な生徒への支援の充実は、今後も、幼小中さらに高という途切れない支援に努めたい。
- ・教育活動における課題の 5 つ目の、1 学年 2 学級規模におけるクラブ活動、生徒会活動の活性化については、少人数のため、かえって一人一人が活躍する機会、発表する機会が増えてくる。少人数のもっている強みを生かして、クラブ活動、生徒会活動の活性化を図っていきたい。

(茅野高等学校 志津 千代子校長 事前配布資料 P2)

- ・現在 2 年生、3 年生は 3 学級募集で、この春から 1 年生は、2 学級募集で全 8 学級。在籍生徒は、218 名。一時期 360 名定員という時代もあったが、今は少人数の学校。
- ・1 年次は全員で、共通の学習となるが、2 年次以降は希望に合わせて、コース制の選択授業と共通授業を取り入れながら、進路実現に向けて頑張らせている。進路としては、卒業生の約 6 割位が就職、4 割位が進学となる。進学者の中には、県外に出ていく生徒が 1 割程度いるが、就職者は、ほとんど諏訪地域の企業に就職している。というのも、本校は昭和 17 年の創立になるが、創立以来、教育理念は、「生きる力を求め、地域を担わんとここに学ぶ」ということで、この地域の良き社会人として、地域の担い手としてということを教育目標として掲げている。
- ・茅野市は、「真ん中に愛のあるまち CHINO」というキャッチフレーズをとっているが、本校も少し使わせていただき、真ん中にいろいろな愛がある茅野高校、愛の中には、LOVE の愛、ME の私への愛、出会いの愛もある。少人数であるが、地域からの信頼、地域を担う人材、他人を思いやるマインドを大切にする人材、他者と人間関係をつくって共同して自己表現できる人材、自分の人生を自分で切り開く人材を育てたいと考えている。
- ・そのために、資料に書かれている、さまざまな「探究的な学び」の取組、「信州学」の取組、特に、地域と連携した活動を重視している。茅野市、原村、富士見町を訪問させていただき、さまざまな地域を生かした活動をしている。
- ・特徴として、保育コースと福祉コースがある。保育コース、福祉コースは、毎週金曜日に地域の福祉施設・保育園にて実習している。その中で、人数が少ないということは、教員数も伴って減ってくる。さまざまなコースを展開していくには、いろいろな形で授業を組む上でも、教員数が必要となってくるが、その設定の幅が狭まってくる可能性がある。生徒会活動においても少ない人数の中でやらなければならないため、本年度は文化祭を 1 日縮小している。また、部活動も選べる種類も減ってきている。併せて校舎が築 50 年以上経過しており、新しい教育に対応した機能的な校舎になっていない。
- ・この広い地域で、地域活動や学校間連携を実施するには、生徒をどのように安全に移動させるのかという課題がある、その部分については、本校だけでは解決しない。多くの方々のお知恵を頂きながら、これからやっていかなければならない。

(諏訪実業高等学校 加藤 尚也校長 事前配布資料 P3~4)

- ・大正 9 年に認可された、高島裁縫専修学校、昭和 15 年に諏訪商業学校になり令和 2 年度に創立 100 周年を迎える伝統ある専門高校である。
- ・商業科、被服科をうたっていた時代は、そろばん、簿記、裁縫、そういうイメージが強いと思うが、現在は、商品開発、マーケティング、そうしたビジネスの幅広い分野を学ぶ商業科、プログラミングなどの情報知識を培う会計情報科、デザイン感覚やファッションセンスを高める服飾科の 3 つの専門学科か

らなり、ビジネス、ファッションに関するスペシャリストとの学びを追究している。ビジネスに関する実践の場である、諏実タウンは10月に開催し、多くのお客様に会場いただいた。

- ・服飾科の学習成果発表会のファッションショーは、来年1月18日に諏訪市文化センターで開催する。
- ・諏訪地方の多くの企業に支えられ、近年の就職状況も大変順調である。今年度の卒業生169名の内80名が就職を希望し、ほとんどが内定をしている。そのほとんどが、諏訪地域の企業である。ゆえに、明るく、素直で、積極的な即戦力の人材を育成することが、本校のミッションであると考えている。
- ・経営者の皆さんとお話を聞くと、一番つけてきて欲しい力は、人と協力する力、協力するために話を聞く事ができる力、そして自分の考えを伝える力と言われます。生徒に高校時代何を学ぶのかと聞いてみると、まず検定を頑張ると言いますが、それは自分の勉強の成果が明確に分かるからです。もちろん検定も頑張らせますが、その中で、本当に必要な力を養うことが高校の課題と考えている。
- ・昨年度より3年間取組んできた、文部科学省の事業によるスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）の「文化ビジネス」エキスパート育成プロジェクトはまさにその出発点であり、転換点だと考えている。
- ・現在その後継事業として、「地域人教育・諏訪」に取り組み始めている。これは諏訪地域を愛し、理解して、諏訪の人々と新たな創造を展開し、地域に貢献できる人材を育てようとするものである。具体的には、1学年では諏訪地域で活躍している方々に来校いただき、諏訪の歴史や現状認識についてお話をいただく。そして、諏訪の認識を深める。2学年では、生徒が地域に出向きやるべきことや課題を見付ける。そして、3学年で具体的な商品を企画、開発し地域に発信していく。この推進のため、諏訪市を中心にパートナーシップ協定を締結していますが、今後も積極的な関わりを続けさせていただければ大変ありがたい。生徒の、「こんなものがあつたらいいな」「こんなものを実現したいな」を、地域の皆様と具体化していく諏訪実業高校でありたい。

<定時制について>

- ・定時制と言うと、諏訪の本校と下諏訪にも分校があった。経済成長期には、同窓会の方々にもよく言われるが、「良く勉強するのは当たり前、工場が終わったら、一目散に学校に行き、学校でごはん片手に勉強したものだ」と言われますが、資料によれば、昭和34年下諏訪町分校在校生109名の内、ヤシカに勤務されていた方が43名、47年三協精機に勤務されていた方が37名という形で、本当に金の卵で入社した方が、会社に出て定時制に通うという状況でした。しかし、ドルショック、オイルショックと世界的な恐慌が続く中で、昭和の後半から実績が大きく変化してきている。
- ・本校定時制も、平成25年位から生徒数が一気に減少し、現在は41名の生徒が通っている。この41名のうち8割の30人位が、中学校時代に不登校を経験していたり、中間教室への登校したりという形で中学校時代ないしは、小学校時代そのような形で生活をしていた。しかし、高校生になると、ほとんど休まない、みんな同じ位の時間に来る。居場所を求めて、「毎日良く通ってきているな」と感心している。ほぼ5時半から9時という形でやっているが、「毎日、高校に来て勉強したい」と言ってくれる。「すごいエネルギーだな」と考えている。
- ・学校に来られる様になったが、本校では「居場所は見付けられたが、社会に出て見ようか」とアルバイトを勧めている。アルバイトをして、社会との関わりが出来て、少しでも自信を持てれば、勉強する意味が明確になってくる。それが次のステップではないかと考えている。
- ・勉強したいという意欲が高まると、進路も多様化してきます。大学へ進学していく生徒も出てきました。平成27年度に、名古屋外国語大学に進学した生徒が、本校全日制の教育実習を行い、長野県の教員採用試験を受けている。彼女は小学校6年生から中学校まで不登校でしたが、本校定時制で自分の居場所があると信じ英語が好きになり、高校時代英検2級まで合格している。「生徒を信じて心から支えられる先生になりたい」と話してくれた。

- ・一人一人が居場所を見つけて学習ができる、そんな場が本校定時制の現在のあり方と考えている。ただ、非常に多様な生徒がいる中で、どの位の規模で、どの位の職員で展開していくのが今後よいのか、更に少人数の中で生徒の「やりたい」という意欲を高めて行くエネルギーをどう動かしていくのかが大きな課題でもある。現在もほぼ週1人、2人と中学生が、学校見学に来てくれるが、この生徒たちにも「できるだけ中学校に短い時間でもよいから行って見て、それが出来れば高校にも来られる」と言っている。このような形で、定時制のあり方にも関わって頂ければありがたい。

(諏訪清陵高等学校 三枝 是校長 事前配布資料P5)

- ・旧制諏訪中学校から数えて125期生が今、本校1年生に入って来ている。全て普通科の6学級規模の学校で、720人弱の生徒が在学している。教育目標は、校是、教育方針等、昔ながらのものは割愛させていただき、目の前の目標を掲げさせていただいている。
- ・SSHは、スーパー・サイエンス・ハイスクールの略称で平成14年に始まった国の施策と共に、長野県で初めてSSHの指定を受け、今日までで通算16年目になる。第4期指定まで来ていて、1期が3年、2期以降が5年ずつで途中2年の中断があったが、16年目となる。この歴史の中、教育プログラムの中で、このSSHが中核を成しているという状況ですが、先々を考えると第4期の3年目を迎え、4年目、5年目までは保障されているが、次は分かりません。申請して国の認可を頂けるかどうかは未知数であり、そこが不安な所である。本校の伝統である、科学教育を柱に、仮にSSHが無くてもできるプログラムをしっかりと考えて行かなければならないところにきている。
- ・SSHと言うと、理数教育だけと言う印象を与えるが、決してそうではなく、確かに2年以降、理系、文系に分かれた時に、理系の方は6割、文系の方は4割という状況はあるが、科学教育の歴史、伝統というのは、論理的思考力の育成ということになるので、文系、理系問わず、必要な力であるという認識でいくことができる。
- ・不登校に悩む生徒も少なからずいる。そのような子どもたちのために、相談支援機構の充実を図っている。一日スクールカウンセラーに常駐していただき、予約なしで相談に応じる体制を整えている。
- ・「探究的な学び」の取組、「課題解決型学習」の取組は、SSHのプログラムの一貫に位置付けて、特徴的なこととして、「問題発見」という学校設定科目を設けて、1、2年生文系、理系関係なく、全員が一人一研究のテーマを掲げて研究をすることを柱にしたプログラムがあり、それぞれの探究、課題解決能力の育成を図っている。
- ・ICTに関しては、SSHの関係、同窓会の協力、県の支援でかなり充実しており、積極的な活用が出来ている。先生が黒板に図を書いて、それを生徒がノートに写しているという作業的な時間が非常に短縮され、効率の良い授業が出来ていると考えている。
- ・「信州学」についても、地元企業の皆さんと非常に強い連携をさせて頂き、学びの機会を頂いている。100%大学進学を目指す生徒たちですが、大学卒業後、あるいは大学院を出た後必ずしも、すぐでなくても実力をつけ、キャリアをつけて再び長野県に戻ってきて欲しいという願いを込めて、地元の企業と連携を図っている。
- ・地域と連携した活動の2項目の諏訪力講座は、人文科学系の講座。三澤勝衛先生は大正から昭和の初期、本校におられた地理の学者の先生ですが、その先生の名前を付けた自然関連講座等、これらを地域公開講座としている。
- ・教育活動における課題が、4項目あるが、何と言っても中高一貫校である。東北信地域の屋代高校、中南信地域の諏訪清陵高校、県下2校のみの中高一貫校でちょうど6年目を迎え、一期生が高3にきたところである。この春、初めて卒業生を出すということで、まずはこの6年間の総括そして改善点を明らかにして、更に前進を目指すことになる。
- ・中高一貫校は、高校本体の魅力が一番大事で、清陵高校に高校受験無しで入れるということが、小学生

あるいは小学生を持つ保護者方にはご理解いただけることであるので、高校本体に引き続き頑張っ

- ・これからの時代、学校が何をしていくかということですが、学校でしかできない学びの充実が重要で、例えば、どんなにパソコン、AIが発達しても、理科の実験、五感をフルにつかった学びあるいはフィールドワーク、こういうようなことがどんな時代になっても重要であって力を注いでいきたい。
- ・「学び方を学ぶ」という授業のあるべき姿の追究は、100%大学を目指す子ども達を相手に、本校も、物量作戦というか、これでもかというほど課題を与え、これでもかというほど資料を沢山やってということから、少し視点を変えていかないとたないと思っている。教師が扉を開けたら、そこから先は生徒自身が飛び込んでいく、勉強していく事ができるかどうか。学校の教育活動の精選を図って、生徒に時間を返す所は返して、長期休暇を確保して、子どもたちの主体的な学びに期待をしたい。

(諏訪二葉高等学校 守屋 郁男校長 事前配布資料 P6)

- ・明治41年に諏訪高等女学校、旧女子高で112年目となった。昭和62年の4月から男女共学となり、現在の生徒数は、女子が62%で旧女子高の影響で女子が多い。ちなみに83.5%が諏訪地域から来ており、上伊那、松本、塩尻からも15%程度来ている。
- ・教育目標は、「自主・努力・感謝」のもとで、
 - (1) 自主・創造の気風を養う
 - (2) 日々努力し、希望・目標を達成する力を培う
 - (3) 常に感謝の心を持ち、友愛の精神を育むできるだけ生徒たちに、毎日挨拶をしてくださいと言っている。比較的市民の方々からも二葉の生徒からは、挨拶をもらっているとの声。全員ではないが、そんなところを目標にしている。
- ・進路状況については、進学者86.3%、その内大学は70%、国公立45名、短大、専門学校が12%程度、就職はほんのわずかで進学校として活動している。清陵高は理系だという話があったが、二葉は文系を志望する生徒が多い。
- ・部活動も盛んで文武両道を目指している。部活動については、非常に多くの生徒が参加しており運動系の加入率は63%、文科系は39%で合計すると100%を超えるが、変更している生徒がいる。9割以上の生徒が3年まで部活動をしている。入学時は、ほぼ99%が部活動に参加し盛んに行っており、更に生徒会活動も盛んに行っている。二葉祭、音楽会等文化的な活動をしながら、生徒会は役員たちが自主的に先生方の言うことも聞きますが、先生たちの言うことよりも、自分たちでどのような生徒会活動をするかということで自主ということに結びついている。
- ・「探究的な学び」の取組は、この夏にICTと電子黒板が入り、先生方の授業の進め方を効率よくやるということで、電子黒板を活用しながら、時間的なことを浮かせて、そこで生徒たちにできるだけ興味・関心を持たせる、あるいは生徒自身がさまざまなことを考える、そんな授業をするようにしているが、全員がそこまでできているかというはまだだが、研修をすることでこれから目指していきたい。
- ・「課題解決型」、「総合的な探究の時間」は、時間割の中で総合的な探究の時間を取ってきていないので、今後は時間割中に導入してきちんと、生徒たちが3年間を通して、探究的に学んでいき、自分自身の力を付けて行くそんな学校にしたいと考えている。
- ・地域と連携した活動は、卒業生の多くは大学に行っており、最終的には諏訪の方に帰ってくる生徒も多く、就職状況は比較的良いが、そのことから地域と連携してこの地域がどういうところであるのか、しっかりと学ぶということで、改善を進めているところである。さまざまのところと連携して、自分の将来を考えていく核として、最終的には地域に戻って貢献できる生徒の育成に努めたい。
- ・課題は目標のようなことが書かれている。信念を持って自主的に力強く行動したり、自ら学び、自ら課題を解決したりする力の育成については、生徒たちは素直でおとなしく先生たちの言った事を聞くが、

ただ自分でいろいろ考えて積極的にということが出来ないのですそのところを改善していきたい。

- ・地域・大学・高校・小中学校との連携の強化については、将来のことを考えてさまざまな所で連携をしながら、自分の生きる道をしっかり創っていきたくと考える。
- ・部活動の施設不足については、山の手の学校なので、茅野市や諏訪市の施設をお借りしたり、小学校のグラウンドを借りて練習したりしているクラブもあるなど、全部のクラブがここで活動することが出来ないが、今後クラブ活動そのものも時間的に短縮し効率よくやって効果を上げていくことも考えている。
- ・単なる普通科ではなく、諏訪地域に益々貢献できるような過ごし易い学校にしていきたいということで改善していき、ここ数年の内にはそのようになって行くと考えている。

(下諏訪向陽高等学校 八角 裕之校長 事前配布資料 P7)

- ・今年で創立 40 周年を迎える若い学校あり、下諏訪町民の熱い要望によって設立されたと聞いている。そのため教育目標の「3 地域との交流・連携事業を積極的に推進し、地域と協働する高校を目指す」と明記し、それを今まで実現してきている。
- ・学校案内(参照)にあるように、下諏訪町と多岐にわたる連携事業を展開している。町議会議員との懇談や下諏訪みらい議会など下諏訪町の課題や将来について考えること。また、ブックプロジェクトやお舟祭りへの協力などは生徒が主体的に計画して取り組んでいる。また各種イベントを盛り上げるための協力、更に、町の幼保小中の児童・生徒との交流などの事業をしている。取組の単位も、生徒会の執行部であったり、委員会であったり、各クラブ、授業の講座などでも取組んでいる。
- ・事業を通して、生徒たちは確実に成長することができている。教室に留まらない多様な学びを町から提供していただいているということで感謝している。同時に生徒たちが下諏訪町からの信頼を得ており、その表れとして年々事業が増えてきているという現状がある。
- ・課題として、これもまた町との関わりだと考えている。これだけの下諏訪町との連携事業をやっているのに、これを何とか、全校生徒のものに繋げたいということを考えている。ここでいう全校生徒に伝えたいということは、一人でも多くの生徒が関わるということがもちろんあって、今でもやっている事ですが、ここで言うことはそうではなく、「総合的な探究の時間」に下諏訪町との関わりを繋げていきたいと模索している。
- ・また、役場の方に来ていただき、町の現状と課題を町の見線から語っていただき、それを生徒たちと聞きながら、自分たちの見線で町の課題を設定して、その解決策を研究していく、そのことは職員集団も思っている。
- ・これまで下諏訪町と限定しましたが、下諏訪町にこだわらずに、諏訪地域の各市町村の方に来ていただき、ここで考えて行ければということも職員の中にも意見が出てきている。これから研究して実践していきたいと考えている。
- ・他にも特徴として、落ち着いた雰囲気、多様な進路希望に対応した進路指導、更に、毎年国体に出場している漕艇部を始めとして部活動も活発に行われている。学校案内をご覧ください。

(岡谷東高等学校 佐藤 純也校長 事前配布資料 P8)

- ・創立 107 年を迎える。在籍生徒 429 名、学級数 11 で、今年の 1 年生から 3 クラス募集 120 名の定員となった。2.3 年生は 4 学級ずつの 160 人の定員である。教育目標は記述の通り。授業形態は、「健康スポーツコース」と「教養フロンティアコース」のコース制を敷いている。1 年生の時は共通履修ですが、2.3 年から分かれて、「健康スポーツコース」では、社会体育指導者やスポーツリーダーの育成、体育実技の実践、福祉の心の育成等によって、活力ある人間の育成を目指している。「教養フロンティアコース」では、地域連携体験型学習や高大連携等を通じて幅広い教養を身に付け、地域を支える人間の育成を目指していく。

- ・「探究的な学び」の取組については昨年度県の協力で、電子黒板やタブレットパソコンを整備した。タブレットパソコンは40台整備、若い先生方が多いかもしれないが、ICTを使った授業の取組が多く、40台というと1コースであるが、幾つもの講座でやりたいという熱が上がってきて、とても40台では足りなくなった。やりたいときにタブレットパソコンを使いたいということで同窓会にもお願いして、本年9月に教室はもちろんのこと、図書館や体育館等にWi-Fi、無線ネットワーク環境を整備した。このことにより、知識伝達型の授業を見直して行く取組が盛んになってきた。
- ・本年度初めて体育の先生に採用された教員の研究授業が行われた。バドミントンの授業であったが、スマッシュの打ち方を自分のスマホで動画を検索して、こういうふうに打つのかと友達同士研究しながら行う授業を見ていて、大分時代が変わっているのだと改めて感じた。知識だけを問うのではなく、テストにおいても思考力を問う教員が多数でできている。
- ・生徒の力を引き出すための授業改善という課題を上げたが、今の先生方は点でいろいろな取組をしているが、公立の高等学校は人事異動があるので、このような先生方が多く転勤されてしまうと、今まで取り組んで来たことが、忘れられたりということがあるので、点から組織へと言うことで、学習指導に対する新しい校内委員会をつくり、委員会で今後どう授業を進めていったり、生徒の力を引き出すために、どういふことをやれば効果的なのかを検討していければと考えている。
- ・「信州学」の取組について、今年度、鉄道を研究されている方を授業に招いて、もっとJRの駅を増やせば、地域の経済や企業が発展するのではないかと、また、高齢者の自動車免許の自主返納にも繋がってくるのではないかと、生徒は講師の話聞きながら学んでいる。
- ・地域と連携した活動は記載の通り。地元の企業に協力していただき、就業体験を1年生が2日間行っている。
- ・課題として、本年度1年生より120名の募集となった。2.3年生の男女比については、160名の募集で女子が20名ちょっと多い。1年生50名の差がある。男子35名、女子が85名。このことが今後どのように推移をしていくかわからないが、ただこういった数字が続いたとすると、授業の面、クラブ活動の面、生徒会の面いろいろなことで、少し舵を切らなければならないと予測される。今後、校内での議論をしていく必要があると強く感じている。

(岡谷南高等学校 松原 雄一校長 事前配布資料p9)

- ・学年5学級の普通高校。再来年80周年を迎える。昭和26年から34年まで商業科の募集をしていた。平成6年～21年まで、英語科の募集をしていた。現在の生徒は600名弱。平成3年度のピーク時の在籍生徒数1,200名、現在の2倍の生徒がいた。
- ・「探究的な学び」の取組は、平成21年度より、「進学型単位制」、いわゆるセメスター制ですが、履修と習得を完全に分離した単位制で、大学進学にも対応できるカリキュラムを構築している。もともと特徴の出しづらい普通科高校にあって、それまで英語科の教育主査ALTが複数いたり、国際系の学生がいたり、それらを加えて、人文社会系、国際教養系、自然科学系のコース制を設けて、これを65分授業及び半期毎のセメスター、もともとセメスターは前期・後期の意味合いですが、半期ごとの単位認定を実施している。1日65分授業、それに加えて毎朝15分の時間が入っている。放課になると3時40分、拘束時間としては県下で一番長いと思われる。一方、部活動はとても盛んで、7時の電車で茅野方面の生徒を帰さなければいけないので、そこまでの限られた時間で相当密度の濃い活動をしている。
- ・県内では65分授業を65分持たないとか、授業が飛び飛びになってしまうということで取止めたところが多く、現在は数校である。本校ではもう少し65分授業の中で、1時間は知識・理解の習得、対話的で探究的な学習の両方ゆとりを持って行える授業改善を進めて行きたい。飛び飛びになってしまう問題の解決としては、理科や地歴では一科目を半期に集中して開講するなどの、時間割編成の工夫をしている。
- ・「信州学」の取組については、主に総合的な学習の時間、あるいは情報の時間を用いて、地域の文化、産

業についてリサーチ活動をしている。発表方法も工夫を凝らして、プレゼンであったりポスターであったり、文化祭で演劇をやっているが、ここでは「総合的探究の時間」の中身を組み込んで実施するなどさまざまな試みをしている。

- ・生徒会を中心に、他校や岡谷市と「高校生まちづくり会議」に参加している。これをできるだけ多くの生徒が関われる仕組みに考えていきたい。ある学校ではグループで、いろいろなプランを提示して発表会、相互評価で学校の代表意見をセレクションで決め、それを提言していくというスタイルのところもある。それに似た様な形で多くの生徒に関わらせたいと考えている。
- ・地域と連携した活動では、キャリア教育、学校行事運営等等同窓会を始め、地域から支援をいただいている。大変感謝している。地域連携についても、部活動が非常に盛んである。全校生徒の3/4が部に入っており、何らかの部活に所属をしており、この部活の機動性を活かして様々な地域の活動に参加している。生徒自身も学校生活の取組が変わったという例が非常に多く良い事だと思っている。
- ・課題については、普通高校にあっては多様な授業を自由に選択できるようにすることが理想である。そのためには、相当数の教員が必要になってくる。現在は、教員のできる範囲でやっているところもある。
- ・平成3年当時から部活動の数は全然減っていないが、職員は20名減っている。現在は、学年主任も担って複数の運動部を顧問している先生が何人かいる現状である。
- ・地域の活動を取り入れるため、外部講師が継続的に本校に居て頂き、コーディネートしていただけるような講師を任用して、社会に開かれた教育課程を実施したいと考えている。
- ・昭和56年に校舎が改築された。非常に老朽化が進んでいるが、次年度のエアコンの設置、トイレの改修、体育館を大幅改修している。引き続き学びたい安全で快適な環境づくりを進めたい。
- ・教科横断型の「課題解決型の学習」いわゆるPBLですが、全員の生徒が継続的に実施できるようになっていない。教育課程上の工夫、時間の確保、使用する先生のスキルのトレーニングを進めていきたいと考えている。

岡谷工業高等学校 羽毛田 哲朗校長(事前配布資料P10)

- ・5つの学科、5クラス編成。工業科単独の専門高校で全日制。工業科の中身については、機械系、電気系、情報系、化学系の学習内容を行っている。内容は、高校時代に学ぶ勉強の内の35%~40%位の中身は、工業の勉強を行う。中学校から延長している、国社数理英は60%~65%勉強をしている専門高校である。
- ・全校生徒580名、女子が非常に少なく、今年は32名でやっている。卒業後の進路については、就職と進学、ほぼ半数ずつ、卒業生約200名ですので、100名が就職、100名が進学。ここ数年は少し就職希望の生徒が多い現状。
- ・学校の起原は、明治45年に平野村の農蚕学校として学校が造られた。大正から昭和初期にかけて、養蚕、蚕糸、増殖、染色等の繊維産業の担い手を育成する学校として学校を運営していた。昭和に入った所で、増殖機械からの発展と言うことで機械系になった。戦後、工業高校という名前になってきた。諏訪地域の精密機械産業、昭和の時代に大きな発展をしてきた、そんな地域の発展と共に進んできた岡谷工業高校である。
- ・特に108年の歴史の中で、学校の特徴、方針は、諏訪地域の産業を下支えする生徒を育成するという方針が、岡工の根底に流れている。
- ・就業人口について。岡谷市の製造業に携わっている就業人口の割合は、35%の皆さんが関わっている。長野県は25%、全国で言うと10%の比率が一般的な数字になる。岡谷市の35%。そこで地域の企業の中から、沢山の求人を頂いているが、数として100人では足りないという現状がある。これは岡工だけでなく、諏訪圏域の高校の大きな課題でもありと考えている。

- ・高校生活の中で、キャリア教育、インターンシップまた、企業研究を進めることが、この諏訪圏域の高校の大きな課題であると考えている。
- ・地域との結びつきについては、「信州学」として学習に取り入れているが、「地域で学び、地域を学ぶ」という学習をしている。諏訪圏域は、歴史、文化、自然そしてそこに暮らす人々の熱い情熱、どれをとってもこの信州学の取組としては素晴らしいものがある。地域の方々に声を掛けて頂いたり、学校の方から相談したりと地域との連携が進んでいる。市町村、企業の方に学びの充実の面で連携をお願いしている。
- ・ここ数年小学校、あるいは特別支援学校、花田養護学校との連携を進めている。基本的に連携は、岡工生のために行なうという考え方があがるが、地域の子ども達を育てるという責任も、学校の責任として活動を進めている。引き続き地域との連携を進めていきたい。
- ・地域の要望に応える教育、求められる資質能力に向けた生徒の育成、技術をしっかりと身に付けて学ぶ取組等、課題を常に持ち、学習内容の改善、活動の改善を含めて検討している。地域の声を感ずる姿勢、またそういう視点、これが岡工にとっての課題であり目標でもある。

(3) 質疑応答及び意見交換

発言者	内 容
委 員	・岡谷南高校の方で、科目の履修方法の工夫を半期に集中して行ったというお話ですが、具体的に1科目を半期にすると、どのように生徒は学習しているのか教えていただきたい。
岡 谷 南 高	・学校のパンフレットをご覧くださいませでしょうか。岡谷南での学習の流れというページをご覧くださいませたいのですが、一例を上げて説明をします。1年生の理科をご覧くださいませ。生物基礎16～19、この数字は単位を表していますが、生物基礎というのは、元々標準単位が2単位です。この2単位は、週2時間の50分授業を年間35回やると2単位相当となります。これを、65分授業の学校ですと、いろいろな方法もありますが、2週間でひと回り廻す中で、2週間で3回位の授業になります。そうすると、2週間で3回ですが先生方が出張したり、いろいろな行事があったりして、時間、日課の変更があったりすると、授業が2週間、3週間空いてしまうことが出てくるのが実際に起こります。本校の場合これをどうしているかと言うと、4月～9月までが前期となります。その所で、4単位分として授業を実施します。一年間で2単位でなく、半年で4単位実施しています。集中して実施しているというふうに見て頂ければ良いのですが、そうしますと、生物基礎の授業は65分授業で週だいたい、3～4時間位あるので、コンスタントに実施ができます。まとめて授業を実施できるので、テンポよく進む、間が空いては、いちいち復習の時間がかかってしまう、そういうことがなく実施できます。そのような授業が、1年生であれば、地理Aと世界史A、生物基礎と化学基礎、2年生のところは分かりづらくていけないのですが、数学を同様に、半期で切った形でカウントしている。これをもう少し数を多くしたいところですが、時間割編成上の都合もあり現在ここで留まっている。
	※《質疑応答後高等学校長退出》
委 員	・先程の質問にも関連しますが、これからは単位数を増やさなければならない、教員が削減されたら、その高校へ他の学校の先生が来て話すとか、一人の先生をずっと同じ高校に縛っておかない、残りの科目を他で講義する事は可能かなと思ったのです。授業を集中させることの教育的な効果は、生徒さんが覚える上でもいいと最近言われています。それだけでなく、教員が減って来た時に、他の高校が多様な教育したいということがこれから出てくるという

	<p>意見がありましたが、高校の先生を一つに所属しても構いませんが、派遣するというのも必要ではないでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もう一つ、岡谷東高が、スマホを使って体育の時に、どのようにやるかスマホで調べたという話がありましたが、おそらく、インターネットを使った授業は重要だと思います。ICTを使った電子黒板を大学でも買いましたが、飾ってあるだけなんです。役に立たせたいのですが、実際にICTを使ってどのようにやったかと言うと、岡谷東高のようにスマホを使って色々な事を、世界的に調べると言うことは重要だと思っています。 ・私の例でお話させてください。AIのプログラムは一から組まなくてはならない。放っておくと、どっかでコロッとなってしまう。基本となるのは、どこかスマホかインターネットで持ってきて、それに变形を加えて、そうするとプログラミングのスピードが1/3に、時間的にみるとそんなもんです。全てがそうではないですが、AIに関しては、ほとんど、プログラムが公開されているのでそれを利用し使わないという手はない、これからの教育は意外に、そういう方向に行って、インターネットを使いこなすことが重要な時代となってくると思います。そのようなことを岡谷東高はやっているのかなと感じました。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の立場からお話させていただきます。各学校ともこの地域に根差したというところを大事にしていますので、それぞれの地域の役に立っていて良いなと思いました。中学から高校へ進学等を考えた時に、高校に対するイメージを中学生がどういうふうに持てるのか、いいところがあるのですが、中学生に、どうやったら持たすことができるか。私は長峰中学校にいたので、三校で保護者と一緒に地域の掃除をやります。そういう中で繋がっている。そういう意味で、各高校がそれぞれの地域に出て、地域の中の中学生だとか、人々の繋がりをどういうふうにつくっていくかと言うことを学ばせて欲しい。中学でやっても結構難しいですが、チャレンジを。 ・もう一つ、教育センターで産業教育MIRAIフェアが土曜日にあり、各専門学科の高校が全部集まって、プレゼンテーションもしましたが、諏訪実業、岡工の発表を聞かせていただいたが、岡工は優秀賞、実業は、先ほどマーケティングの話もありましたが、実際に花梨の香がするにおい袋を作っている、そういう学びが展開される中で、探究的な学びとは何かという、そういうものを作ってきた中で起きるのが本当の探究的な学びではないかと、そういうところを中学も目指しているのです。しかし、なかなかそうはいかない所が苦しいが、本来的にはICTを取り入れるだけでなく、そういう過程を通っていくことが、探究的な学びになるだろうし、どういう学びをしているかというのを中学生が身近に感じることができれば、そんな学校に行ってみたくて憧れが持てる。是非、そういう発信をお願いしたい。今ちょうど三者懇談で高校選択をしています、単純に決めるのではなく、自分が憧れを持ってこの学校に行ってみたくて、そういう高校の姿が見えるようなものがあるといいかなと思っています。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・先程懇切丁寧なご説明をお聞きしまして、ちょうどこの資料、項目別で、信州学あるいは地域での活動ということで、共通した取組の発表を頂いて、先ほどお話があった、地域に密着した活動、尊い工夫が載っております。進学される者が多い学校あるいは地元で就職される人達が多い高校、それぞれ特徴的なことをされていると思いますが、進学をされる人のUターン率、これが40%を切るように長野県は聞いていますが、諏訪地域がどうなのかは分かりませんが、やはり公立の高校でもあるし、住民の税金から運用されているという点では、出来るだけ地域に戻ってきて、そして、教育に投資した分を地元に戻してもらいたいと思うのがどうしても企業界の気持ちでありまして、そういう意味では、今後の議論を問わずに、

	より突っ込んだ地域連携の活動そして地域愛を育む活動に期待しています。
委員	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの学校が、その地域の連携とか環境の中で工業メッセをあげていただいていることは大変ありがたいことです。工業メッセに各学校が来ていただいて、同じような技術を持った会社が沢山あることを認知して頂き、18歳でいったん外に出ても、戻ってきてくれる契機になればいいなと思っています。ちょっと質問みたいなことを申し上げたいが、この卒業予定者数の表の一番左側を見ると、平成30年から、令和元年で百何十人か減っており、高校で4クラス減らしたと言っていますが、4クラス減らすことは先生も減ったということかどうか、高校は専科でやっているの、英語の先生何人、国語の先生何人、何とかの先生が何人というその規模がどうしても必要となると思いますが、そのあたり、クラスが減って、先生が減って、先生は大丈夫でしょうか。
県教委	<ul style="list-style-type: none"> クラス数が減ることによって、教員の数も減ることになります。どの教科かというのは、減ったことによってカリキュラム、時間割ですか、そういうものももう一回見直すことになる。時間数の少ない、教科についてはその教科の教員が減ることになる。
委員	<ul style="list-style-type: none"> それで成り立つのですか。成り立つようにしているのですか。
県教委	<ul style="list-style-type: none"> 今日の発表にも、教員の数が足りないというような話がありましたが、十分見合う、支障のないような形で配置しています。
会長	<ul style="list-style-type: none"> 授業の集中により先生の共有が可能になるというご指摘をいただいたが、参考になるかもしれません。 現状を把握する意味で管内9つの校長先生たちから説明を頂いた。 今後、一緒に検討していくべき、視点として4つを参考としてあげさせていただいた。この後は進め方に従って、いろいろな皆さんとの意見交換をしていきたい。

6 その他

- 第3回日程 日時 令和2年2月14日（金）午後2時から
会場 諏訪市役所 大会議室(5階)
内容 次第P2参照

7 閉会